明治中

問題解決的な学習を取り入れた授業の研究

～課題設定と協働的な学習の工夫を通して～　（３年計画の１年次）

校長　　松　倉　知　秀

１　研究主題について

自然に恵まれ、歴史ある土地柄で育った本校の生徒は、素直で純朴である。教師の指導を受け入れ、生徒同士の人間関係も温かく良好に築かれている。その一方、小学校からの単級編成による固定化された人間関係の中で過ごしており、物事を多面的・多角的に見ることや、自ら課題を発見しようとする態度に乏しい。また学力差も大きく、学習内容の理解に特別な支援を必要とする生徒が各学級に複数存在する。

これらの課題の解決に向け、１学期に国語、２学期に数学、３学期に英語の「基礎力コンテスト」を実施し、事前・事後指導を計画的に行うことで基礎学力の定着を図ってきた。また、各教科・領域の授業においては、学習形態を工夫すること、教え合い学習を取り入れることに取り組み、理解をそろえて学びに向かう基盤を整え、意見を交流・発表しやすい環境づくりに努めてきた。加えて特に学力差の解消のために、全体指導の中で行う個別指導の機会の確保を進めてきた。

しかし、学力診断テストの結果等を見ると、成果が現れたとは言えない状況にあり、更なる授業改善に向けた取組が必要であることが明らかとなった。

そこで研究初年度となる今年度は、「問題解決的な学習を取り入れた授業」を研究することで、改めて授業づくりに取り組むこととした。具体的には生徒が自ら問いをもてるように導入を工夫することにより課題設定につなげることを通して単位時間や単元の指導を見直し､授業改善を進める。また、意見の交流につながる協働的な学習の場面を取り入れ、学習内容の定着やより深い学習への意欲付けを図りたい。

２　研究のねらい

生徒の主体的な学びにつながるよう、課題設定の場面を工夫し、単位時間・単元の学習を通して課題解決を図れる授業づくりを目指す。また協働的な学習の場面を取り入れることで、学習内容の定着や探究的な学習の実現を図る。

３　研究仮説

授業の中に、生徒が自ら問いをもてるような課題設定の場面を工夫し、単位時間や単元を通して解決に向かう見通しがもてるように授業を構成すれば、生徒の主体的に学ぶ態度を育成することができる。

また、協働的な学習の場面を意図的・計画的に設定することで、相互に疑問点を解決したり意見を交流したりする機会が確保され、学習内容の定着や深化を図ることができる。

４　研究内容

(1) 生徒が自ら問いをもてるよう、課題設定場面を工夫する。
(2) 生徒の主体的な学習につながるよう、協働的な学習の場面を工夫する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年 ・ 授業者 ・ 題材名 ・ 講師 ・ 成果 ・ 授業の概要　等
4	4	全体会（共通理解）　「研究主題・副題」
6	7	第１回授業研究（相互授業公開） ３年道徳　授業者　髙橋由香里　「三年目の「ごめんね」」
7	3	第２回授業研究（要請訪問） １年道徳　授業者　木村　拓実　「席を譲ったけれど」
	4	第３回授業研究（相互授業公開） ２年道徳　授業者　太田也主志　「許せないよね」
	13	第４回授業研究（相互授業公開） １年道徳　授業者　古舘佳代子　「ひまわり」
	21	全体会（授業改善チェックシート結果の共有と授業改善の方向性の検討）
8	21	全体会（共通理解）　「学習指導案の作り方・様式の確認」
	31	第５回授業研究（相互授業公開） ３年道徳　授業者　夏坂久美子　「私がピンク色のキャップをかぶるわけ」
9	11	第６回授業研究（相互授業公開） Ｃ組自立活動　授業者　北山　鈴子　「自分を知ろう（人と個性）」
	14	第７回授業研究（相互授業公開） ２年音楽　授業者　沢森真奈美　「浜辺の歌」
10	3	中教研領域発表（全学年　道徳）
11	8	計画訪問（国語、社会、数学、理科、音楽、道徳、自立活動）
1	29	全体会（授業改善チェックシート結果の共有と授業改善の方向性の検討）
2	21	全体会（今年度の成果と課題、次年度の副題の検討）

(2) 一般研修

月	日	内 容 ・ 講 師 ・ 概 要 等
6	21	ＮＲＴ及び知能検査の結果の分析・考察、共通理解
	26	学校体制支援「ハイパーＱ－Ｕ分析」　原寿 学校体制支援アドバイザー
1	9	学校体制支援「ハイパーＱ－Ｕ分析」　原寿 学校体制支援アドバイザー

６　研究の成果

(1) ペアやグループで話合いや意見交流を行うことや、他の人と同じ意見であっても自分の言葉で発表することで、自分の意見の根拠を挙げられるようになってきた。
(2) 教科によっては、立場をはっきりさせ、自分の考えをもたせることで、自分とは違う意見をよく聴くようになり、自分の意見も自信をもって発表できるようになった。
(3) 相互公開授業についての話合いをその日の放課後に設定した。参加できる教員は限られていたものの、授業のよかった点や改善案などの話題が豊富に出る充実したものとなった。

７　研究の課題

(1) 授業改善チェックシートの集計結果から、「根拠をつけて自分の意見を発表させる」指導が難しいと教師が感じていることが分かる。根拠となる事項が知識として身に付いていることや、発表の仕方や話合いの深め方の例示も大切であり、今後も根気強い指導の継続が必要である。
(2) 生徒が問いをもつような課題設定の工夫について、教科の特性を生かしながら研究を進めてきたが、それぞれの教員が悩みを抱えながら日々の授業に取り組んでいる様子が見られた。今後は、各教科の授業において、生徒への課題のもたせ方を更に工夫し、集中して学習に取り組めるような授業づくりを目指していく必要がある。

（　記入者　髙橋　昭　）